

月刊 地域支え合い情報

東日本大震災の被災者の生活を支援するあなたのための情報紙です。



お手製の休憩場所で気心知れた仲間とお茶とおしゃべりを楽しむ（大畑浜グラウンドゴルフ愛好会）

特集 みんなのたまり場

- 地域で寄り合う最善の一手 麻雀がつなぐ輪 ③
麻雀教室・同好会（宮城県仙台市青葉区）
- 創設15年の歴史あるサロンは、住民みんなで育ててきた宝物 ⑤
いきいきサロン代ヶ崎（宮城県七ヶ浜町）
- 馴染みの顔が集う、生きがいの場所 ⑦
大畑浜グラウンドゴルフ愛好会（宮城県亶理町）

☆専門家に聞く地域づくりのヒント
（四日市大学 総合政策学部 教授・学部長 鬼頭 浩文さん）

東北の元気③ ⑨
一般社団法人日本カーシェアリング協会（宮城県石巻市）

まちの仕組み③⑩
連携したコミュニティ支援で包括的なまちづくり（宮城県山元町）

まじわる災害公営住宅⑩ ⑫
女川町運動公園住宅 ふれあいカフェ（宮城県女川町）

「地域支え合いサロン」レポート
S-1グランプリ第4回いがす大賞応募案内 ⑬

平成・向こう三軒両隣事情⑥ ⑭
ご近所福祉クリエイション主宰 ご近所福祉クリエイター 酒井 保さん

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ ⑮

暮らしを支える支援員⑫ ⑯
仙台市社会福祉協議会・中核支えあいセンター（宮城県仙台市青葉区）

みんなの

たまり場

みんなが集まれる場所

自然に足がむいてひとところに集まる

おなじ場所でおなじ時間を共有する

そうして、きた人たちがみんないつの間にか笑顔になって

前よりもちょっと仲良くなる

入りたい人が入る「みんな」の輪

義務からじゃなく、強要されるわけでもない

そんな関係が心地良い

麻雀を打ったり、歌を歌ったり、ゴルフをしたり

かたちはいろいろだけれど

共通しているのは「好き」、「楽しい」というキモチ

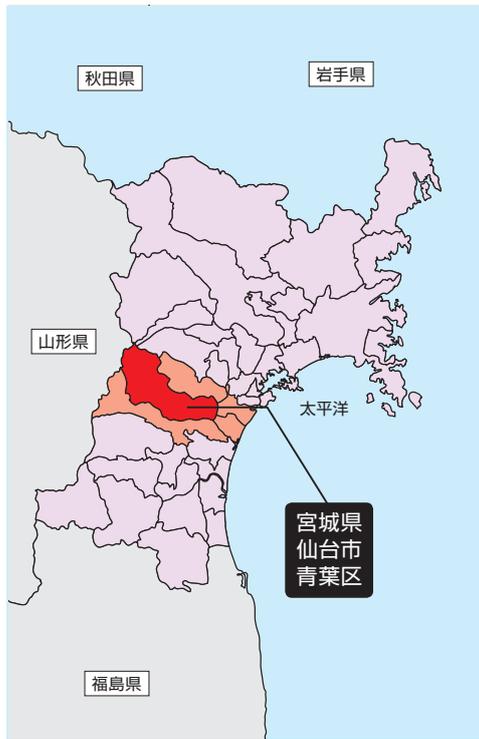
きっと、そういうキモチが人を呼んで、人を結ぶ

そして、それぞれの場所には

その場所をつくりあげてきた人たちの

想いと工夫がちりばめられている

そこにはどんな物語があるのか、覗いてみましょう



麻雀卓を囲むうち、自然と笑顔がこぼれる。

地域で寄り合う最善の一手 麻雀がつなぐ輪

◎麻雀教室・同好会（宮城県仙台市青葉区）

ポイント

- 麻雀の魅力から、復興公営住宅の住民や周辺地域の住民も積極的に参加
- コミュニケーションを内在している麻雀が、遊びと関係づくりを担っている
- 脳内を活性化させる麻雀は、老化防止に役立っている

宮城県仙台市青葉区にある梅田町復興公営住宅の集会所では、「麻雀教室・同好会」が開かれている。ここには、同住宅の住民はもちろん、梅田町や周辺地域の住民も仲間に加わっている。

「広く地域の人から参加したいという声があった行事は、これがはじめてだと思えます。それだけ麻雀の魅力、人を引きつける力というのは大きいんですね」と、麻雀教室の運営に携わる、梅田町内会長の木村純一さん（61歳）は、参加者の熱意を感じている。梅田町内会の掲示板で同教室を告知したところ、梅田町内会や周辺の北六町内会の住民からも参加希望があったという。「麻雀は、お話ししながらできるよさがありますね」と木村さん。麻雀が、復興公営住宅や周辺地域の住民同士をつなぐコミュニケーションツールになっているようだ。

麻雀教室ができるまで

2015年4月に入居が始まった梅田町復興公

営住宅。同住宅は自治会をつくらず、既存の梅田町内会に加わる形をとっている。16年の町内会総会で、同住宅における交流が少ないとの話が住民から出た。それまでも集会所でサロンなどを開いてはいたが、「なかなか『話をする』だけでは、人が集まりにくいようです」（木村会長談）と交流を活発にするには至っていなかった。そうした声を受けて、同住宅住民の一人、荻野洋一さん（75歳）から、「交流不足を解消するのに麻雀というのも一つの手ではないか」という案が出た。もともと麻雀の経験豊富で、大会にも参加経験があったとい



参加者の打つ一手を見守る木村さんの優しいまなざし



梅田町内会

会長 木村 純一さん

「地域の皆様が麻雀を楽しみ、交流を図る場に」

う萩野さんならではの打開の一手だった。ただ、町内会費で麻雀卓など備品をそろえるのは難しく、人が集まるかどうかなどで当初は木村会長たちに躊躇もあつたという。そんなとき、宮城県の「地域コミュニティ再生支援事業」を知り、町内会として今年4月に申請をすることにした。その結果、助成金を得て、麻雀卓や麻雀牌をそろえることができた。

会が始まったのは今年6月から。始まった当初は、萩野さんが麻雀のマナーやルールを決めるなど、中心になって運営し、「リーダー」としてみんなから親しまれていた。ところが、萩野さんが体調を崩して入院したため、いまは木村会長が代役を務めている。運営について「『先ヅモは厳禁』『捨て牌は6枚ずつ列を変える』など、萩野さんはルールを厳密に決めています。ゲームの格式を大事にしているようですね。コミュニケーションの活性化に加えて、麻雀の奥深さと面白さを



梅田町復興公営住宅の様子。当日はのぼり旗を立てて歓迎

皆さんに知ってもらいたいという萩野さんの思いがあるのでは」と、木村会長はその思いもたいせつに続けている。

現在、「麻雀同好会」を月2回（毎月第2、第4水曜日）開催し、麻雀の経験者が集まって楽しんでいる。そのうち第2水曜日には、「麻雀教室」も併設。麻雀経験者だけでなく、未経験の参加者には特に、木村さんが懇切丁寧に教えている。同好会は参加費が100円、教室は参加費無料となっている。参加者は10人弱で、70歳代が中心。復興公営住宅の住民と地域の住民ではほぼ半数ずつが集まっている。

麻雀がきっかけで 交流が広がる

まだ始まったばかりの同会だが、復興公営住宅の住民からは、「ここで知り合いができた」という声があがっており、コミュニケーションを増やす場として一定の成果があがっているようだ。地域の住民からも、「昔会社でやっていたが、退職して近所に麻雀を打てる人もいなかったのでここで打てるのはなつかしく、楽しい」「頭を使うからほけ防止になる」と好評。

木村さんも「こういう場で、麻雀以外の話も少しずつできるようになってきたと思います。暮らしの不満を話したりして、同じ悩みをもっているんだと、共有できるのは大きいと思います。市などに個人的に相談すれば一対一のやりとりですが、こうして住民同士集まって話すことで、情報交換ができ、面的な広がりが見られると思います。地域支え合いの輪づくりの第一歩ですね」と



会が始まる前のひとときの談笑

話す。

麻雀教室のこれからについて木村さんに尋ねると、「麻雀のための麻雀にたらないようには気をつけたいです。あとは、私だけで絵に描いた餅をイメージするのではなく、1回1回、回を重ねて、実際に参加者からいただいた声を受けとめて、次を考えたいです。萩野さんとも相談しながらやっていきたいです」と話してくれた。麻雀のように、場の状況を読んで相手の反応を受けとめて、次なる一手を探っていく。そうして積み重なるものは、きっと「みんなにとつて住みよいまち」にもつながっていく。



ボールを使ったゲーム。みんな笑顔でボールの行き先を見つめる

創設15年の歴史あるサロンは、 住民みんなで育ててきた宝物

◎いきいきサロン代ヶ崎（宮城県七ヶ浜町）

ポイント

- 総勢80人を超える大所帯のサロンは、地区全体の住民が顔をあわせて交流する場であり、健康づくりや見守り、生きがいにもなっている
- 地区や町、社会福祉協議会の協力と住民主体による組織だった運営が長期継続のキギに

宮城県七ヶ浜町代ヶ崎^{よがさきはま}地区は、町の北東部に位置し、日本三景の松島湾を目前に臨む。そんな海に囲まれた美しいまちの片隅で、早朝から、高齢の住民たちが大勢集まって談笑している光景が見られる。住民たちは代ヶ崎浜地区避難所（公民分館）に向かうバスを待っている。同避難所では、「いきいきサロン代ヶ崎」が開催されており、バスが送り迎えをしてくれるのだ。役員が町から借りたバスを運転して送迎してくれるので、身体に不自由がある人も参加しやすい。現在の会員数は約70人。70〜80歳代が中心で、昔からの地区住民が大半を占める。

ある日のサロン風景

同サロンは月1回開催されており、2016年で15年目。毎回違ったプログラムとなっていて、これまで、遠足や映画上映、理学療法士を招いての健康体操、ものづくりなどを行ってきた。

ポーツ推進員（公民館の下部組織。地区の住民が担う）がボールを使って体を動かすゲームを紹介。みんなが輪になって遊んだ。同推進員以外にも、区の健康づくり推進員が昼食づくりを協力して、地域のいろいろな役割の人がこの場で連携している。町と社会福祉協議会からは、講師の紹介や助成金を受けており、運営維持につなげている。こうした連携が、同サロンの特徴であり、強みでもある。

取材日（16年9月）のサロンでは、町の中央公民館の出前講座として、ス

「友だちがいっぱいいるから、うんと楽しい」と満面の笑み。昼食を経てサロンは閉会し、会員も含めてみんなで後片付け。帰りには、役員が会員一人ひとりに「どうもね」「気を付けてね」と声をかけて、見送る。役員は「参加者がよるこんで帰る姿を見るのがなにより」と顔をほころばせる。



いきいきサロン代ヶ崎浜 会長

代ヶ崎浜地区 区長 伊藤 喜幸さん

「皆さんに楽しんでもらえるように。地区全体として取り組んでいます。強制はできませんが、できるだけ多くの方に参加してほしいです」

いきいきサロン代ヶ崎の
あゆみ

同サロンのあゆみをたどると、2000年までさかのぼる。その頃から高齢化が進みつつあった代ヶ崎浜地区。当時の民生委員、伊藤芳蔵さんが、高齢者の孤立や孤独死を予防したいと、サロンを計画。「いきいきサロン」の名前の由来も、「みんながいきいきできるように」と、住民の健康やふれあいを願う気持ちからきている。

伊藤芳蔵さんは、設立にあたって地区の助けが必要だと考え、地区区長と評議員からなるボランティア役員を結成。町や社会福祉協議会などとも話し合いながら準備をし、回覧で参加者を集めて、02年からサロンを開始。行政の力を借りつつも、あくまで住民が企画から運営までを行っており、いきいきサロン代ヶ崎は「町内で最初に住民主体でつくられたサロン」である。

現会長の伊藤喜幸さんは、サロン設立について、「きっかけは、強制されて



食事テーブルを囲んでリラックス。友人同士話し込む姿も。

やるのではなく、住民が主体的に活動をつくっていかないと難しい。住民がリーダーシップをもってやってほしい。行政からは、やりたくてもやれないでいる、その一歩を踏み出せるようなあと押し、指導をしていただけたら」と話す。

設立からずっと月2回のペースで継続されてきた同サロンだったが、11年3月の東日本大震災でやむなく中断する。海沿いのこの地区も震災で大きな傷を受けた。他地域に避難して、いままも戻らない人もいる。会場であった公民館も損壊した。現在も建設中の防潮堤は、震災前と比べて約70センチメートルのかさあげ

がされる。「なにかあったらと思うと必要なことだけれど、海を見渡せる景色が変わってしまうのは少しさみしいね」と住民がつぶやく。

そんななか、同年10月、3代目会長を務めてきた伊藤喜幸さんは、サロンの再開を決意。当初は反対の声も多かったというが、「いまやらないと代ヶ崎がダメになる」と町の老人福祉センターを借りて、月1回の形でサロンを再開させる。震災後で、落ち込むなかだからこそ、みんなが集う意義があったのだろう。やがて少しずつ住民の理解を得て、参加者が集まり始める。昔から付き合いのあるみんなが集まる場が力になると感じたりも会員が増えた。15年6月には、新築された地区避難所に活動の場を移して、いまに至るまで続いている。そんなサロンは七ヶ浜町社協の職員から「七ヶ浜の宝」と称されている。

受け継がれる宝

毎回サロンの一週間前には、9人の役員がミーティ

ングをして、準備について活発に議論を交わす。会員には、毎月戸別に告知のチラシを配付している。運営にあたって役員は、「みんなでも楽しくやるにはどうすればいいか考えるようにしている。自分たちも手足を動かして一緒に楽しめない」と長く続かない」と話してくれた。地区の住民である役員にとっても、サロンで役割を果たしていくことが、生きがいの一つになっているようだ。

一方で、課題として役員が口をそろえたのは、「後継者の育成」だ。かつて同地区は自営業者が多く、時間融通がきいて地域活動にも参加できた。ところが最近では、若い世代は区外に働きに出ていて、ふだんの参加は難しい。それでも、夏祭りの運営で若い世代にも協力してもらってつながりをつくるなど、少しずつ、次世代にサロンを引き継ぐことも見据えている。

住民にとってかけがえのない居場所が、これからはこの地区で変わらないうちにあり続けることを願ってやまない。田



自分たちで整地したグラウンドでゴルフを楽しむ

馴染みの顔が集う、生きがいの場所

◎大畑浜グラウンドゴルフ愛好会（宮城県亘理町）

ポイント

- 男性の集まりやすい「秘密基地」のような居場所
- 身体を動かし、自分たちでイベントを企画するなど、楽しみながらの介護予防
- 生活を再建したあとにも続く、震災以前のご近所づき合い

亘理町沿岸部の空き地で、木曜日と日曜日の週2回、グラウンドゴルフを楽しむ「大畑浜グラウンドゴルフ愛好会」。10年ほど前から活動をはじめ、いまでは30人を超える会員を擁している。会員のほとんどは大畑浜地区を含む同町吉田浜地区で生まれ育ち、幼い頃からの顔見知り同士。少年時代の雰囲気そのままに、気の合う仲間が和気あいあいと楽しい時間を過ごしている。

手づくりの「秘密基地」

東日本大震災の際、津波で大きな被害を受けた大畑浜地区。両脇に草木の生い茂る、未だ整備の終わらない砂利道を抜けた先に、同会が集う空き地がある。

同会の活動は準備体操がわりのラジオ体操から始まる。身体がほぐれたらよいよゲーム開始。グラウンドゴルフはホールインまでの打数を競うが、ここではよりわかりやすくホールインワンの数を競う。ホールインワン一回ごとに同会に100円を支払うルールになっており、これが活動資金となる。集めた資

金は年に数回の温泉旅行や芋煮会、忘年会などの開催に利用される。「入った!」「惜しい!」と「打ごとに」喜「憂しながら回るコースには、笑い声が絶えない。

全4ゲームを行ううち、2ゲームが終わると休憩をとる。夏には冷たい麦茶、寒い時期には温かいコーヒを飲みながらのおしゃべりも、楽しみの一つだ。ベンチャ小屋、その脇にあるグラウンドゴルフの用具入れなどは、すべてメンバーの手づくり。まさに自分たちでつくりあげた「秘密基地」といった風情だ。

いつまでも若々しく

「俺たち、いくつに見える?」といったずらっぱい顔で問いながら、快活に笑うメンバーの平均年齢は80歳代半ば。なかには90歳代のメンバーもいる。

同会では体力づくりのため、通常8ホールのところを10ホールに増やしているが、コースを回るメンバーの足取りは軽く、まったく年齢を感じさせない。

「ここに来ると若返る。元



ゲームの後にはホールインワンの数を報告

れてくればいい。絶対に元氣になつて帰るから」と会長の小野賢治さん（88歳）が自慢げに話すと、あちらこちらからメンバーの同意の声が高らかに響く。「こうしてみんなで楽しく過ごすが、何よりの生きがい」という言葉のとおりに、休憩中やゲームの合間にも、次の行事の計画について話し合ったり、旅行の思い出話で盛りあがるなど、話題はつきない。生きいきといまを楽しむ様子は、見ていてとても清々しい。

震災の前には、巨理町の汽水湖「鳥の海」近くの公園で活動していたが、津波の被害を受け場所の変更を余儀なくされた。その後も何度か場所を変えたのち、もとは畑だった空き地に土を入れ、自分たちで整地を行い利用できるようにした。

困難に見舞われながらも活動を続けてこられたのは、「みんなで集まると楽しい」というシンプルで大きな原動力があったからだ。

吉田浜地区は震災以後、災害危険区域に指定された場所も多い。巨理町の災害危険区域内では条例により、もともとあった住宅を修繕して居住を継続することは可能だが、新たに住宅を建てることや建て替えることが制限されている。そのため、災害公営住宅や災害危険区域外に自立再建した家から通っているメンバーも多い。

会が終わったあとには、数人のメンバーが小野さんの家集まり、お茶を飲んだりお昼を食べたりすることもある。住む場所こそかつてのよう気軽に近所つき合いができるような距離ではなくなつてしまったが、定期的に集う機会を設けることで、新しい環境に身をおきながらも、馴染みの関係を切らずに続けることにもつながっている。

気心の知れた仲間と楽しい集まり、そしてにぎやかなおしゃべり。人生を思いきり楽しむ秘訣が、そこにあるような気がした。吉

四日市大学総合政策学部教授・学部長

鬼頭 浩文(きとう・ひろふみ)さん



2011年に、四日市東日本大震災支援の会（平成28年防災功労者防災担当大臣表彰受賞）を学生や同僚と立ち上げ代表に就任、現在に至る。学生と災害支援を行うのと並行し、学生機能別消防団の結成や学校防災ボランティア事業など、三重の地域防災に中高大生が貢献する仕組みの構築に尽力している。

専門家に聞く地域づくりのヒント

仲間と次の目標を設定し、笑顔で前に進む苦勞にこそそれぞれが希望を見出す

人はみな、困難や悲しみを抱えている。被災地では、家族や親せき、友人を亡くしたり、家を失ったりした人も多い。避難所から仮設住宅、災害公営住宅や自力再建などの自立に向けた過程では、何度も立ち止まり、嘆き苦しむことも多かったと思われる。復興への歩みでは、行政も被災した住民も、精いっぱいである。

とはいっても、いち早い復興のためといって趣味や笑いを完全に封印しては窮屈でストレスばかりである。笑顔が溢れる復興とは直接関係ない「遊び」がなければ、おそらく人は前に進む負担に押しつぶされてしまう。自動車のハンドルに「遊び」という緩みがあるのと同じであろう。ここで紹介された3つの事例には、どれも「遊び」があり、笑顔が似合っている。

復興に向けた「共助」のためのコミュニティづくりでは、この「遊び」がきっかけとなって友だちができ、生涯の友として復興に向かう「仲間」を得ることもつながる。ボランティア団体や行政・社協などがおぜん立てする交流会やイベントでは、笑顔が溢れて、友だちもできて、コミュニティの結束には大いに役立っている。しかし、そこには「やりがい」という要素がない。復興に向けてコミュニティで助け合いながら前に進む「自立」には、「やりがい」から来る勇気や元気が必要ではないだろうか。

コミュニティ形成に、サロン活動など外部からの支援が

助けになることは間違いない。しかし、どこかのタイミングで、住民自らがお茶会を企画するようになり、趣味のサークル活動を始め、やがて住民主体のここの事例にあるような活動へと発展していく。これらの事例紹介では、つい完成形である「結果」に目が行きがちであるが、その過程にある苦勞こそ「結果」にある心の底から湧き上がるような笑顔につながっているのではないだろうか。

私は、一人だけで食事をするときは、スーパーマーケットで買った総菜を容器から直接食べ、簡単に済ませてしまうことが多い。そこには満腹感はあるけど、満足感はない。しかし、仲間と鍋パーティーをするとき、誰かがとっておきの酒を持ち込む、誰かが机やイスを快適に配置してくれる、素材やダシにこだわる面倒なヤツがいる、準備の下ごしらえで黙々と張り切る裏方がある、そんな鍋には不思議な美味しさがあり、自然と笑顔が溢れる。

人は、「誰かのために」というときや、「誰かと一緒に」というときに、前に進む気力が出る。仲間と前に進む苦勞には、その先にある希望を予感させるパワーがある。そんな仲間との苦勞があったからこそ、いきいきサロン代々崎のにぎやかな昼食があり、麻雀がつなぐ輪があり、グラウンドゴルフの秘密基地でのワクワクする笑顔がある。だからこそ、支援する側は、そこにある苦勞を奪わぬようにしたい。

DATA

一般社団法人
カーシェアリング協会

〒986-0005 宮城県石巻市大瓜
字鷺ノ巣45-1 仮設大瓜団地集会所内
〒657-0051 兵庫県神戸市灘区
八幡町3-6-19 クレアル六甲1階
TEL / FAX 0225-22-1453
URL <http://japan-csa.org>

33回目

市民リレー

東北の元気

今回は...

東北の力をつくりだす人・団体を紹介します。

道なき道に、「住民同士の 支え合い」という轍を残して

◎一般社団法人日本カーシェアリング協会（宮城県石巻市）



旅行先での一枚。吉野町復興公営住宅の住民と同協会の車の前で、みんな笑顔の輪



日本カーシェアリング協会代表の吉澤武彦さん



住民同士の決算の集まりを終えて。木村さん（前列右）と後列右が同協会の河合美華さん

本紙10号（2013年6月）で「住民をつなぐ鍵」として紹介した、日本カーシェアリング協会の取り組み。同協会は東日本大震災後に設立され、被災した住民の移動手段や関係づくりに役立つように、と車を貸し出して共同利用（コミュニティ・カーシェアリング）を提案してきた。グループで申し込み、運用のルールは利用者同士で話し合って決める。カーシェアがきっかけで、仮設住民に自治会が生まれたり、ゴミ拾い活動が始まったりと、地域づくりに成果をあげてきた。同協会は、石巻市と東北大学、石巻専修大学、仮設自治連、コンサルタントからなる検討委員会を設置。カーシェアの効果の検証もしている。

当時、仮設住宅で利用されてきた車は、いま復興公営住宅の住民にも利用されて、新たな絆を結んで走り続けている。吉野町復興公営住宅の住民である木村隆幸さんは震災当時、仮設万石浦団地の住民としてカーシェアを利用してきた。その縁で、復興公営住宅に移住後も利用を継続。すると、同住宅のほかの住民からも申し込みの希望があとを絶たず、新たな利用者の広がりを見せている。同住宅では、木村さんが管理を担当し、利用者へ鍵の受け渡しをしている。年齢などで運転が難しい住民には、木村さんがボランティアドライバーとして、運転を代行することが多い。買値のものに、病院に、と日々車を利用する機会が多い。住民は「本当に助かる」「いまや生活の一部」と話す。



連携したコミュニティ支援で 包括的なまちづくり

宮城県山元町



2016年10月23日、宮城県山元町では、新しく居住区域として整備された新山下駅周辺のつばめの杜地区と、新坂元駅周辺地区の2か所を会場に、まちびらきが行われた。当日はおよそ5000人が来場。特産のホッキ汁がふるまわれ、

たくさんのお店が設けられた。さらに、音楽に合わせたステージパフォーマンスが披露され、にぎやかな時間をとおして、住民らが新しい地域やそこの生活への期待を新たにした。12509人(2016年9月30日時点)が暮らしている同町は、東日本大震災の津波により、総面積の約37パーセントにあたる24平方キロメートルが浸水。2200世帯以上が全壊したうち、半数近くが流出によるものだった。大規模半壊や半壊もそれぞれ500棟を超え、さらに1100棟以上が一部損壊の判定を受けた。

現在は、新市街地と呼ばれる3つの地区、つばめの杜地区、新坂元駅周辺地区、宮城病院周辺地区に計490戸の災害公営住宅が建設されたほか、分譲用の宅地も整備されてきている。町は保健福祉課被災者支援室を中心に、地域包括支援センターや同町社会福祉協議会などがこまめな情報交換などを行いながら、

2015年度、同町は「震災後すまいとくらしのリカバリー計画」という事業に取り組んだ。町の保健福祉課被災者支援室と地域包括支援センター、同町社会福祉協議会や、同社協が運営

し、仮設住宅入居者への個別訪問などをする支援員が配置されているやまもと復興応援センターが、情報共有を行いながら、仮設住宅入居者の転出を支援するものだ。

2015年度、同町は「震災後すまいとくらしのリカバリー計画」という事業に取り組んだ。町の保健福祉課被災者支援室と地域包括支援センター、同町社会福祉協議会や、同社協が運営

るか、町民の生活に携わる機関・部署の垣根を越えて、入居者に寄り添いながら道筋を固める。

入居者それぞれがイメージする、仮設住宅を出たあとの暮らしをふまえて、必要な準備のための相談のするなどしてきた。計画が不明確だったり、予定どおりに進めることが難しいと思われる再建困難者には、一人ひとりのカルテを作成。生活の様子から、生活再建のためにどのような課題があるか、その課題を解決するにはどのような方法があ

ていない人も多い。一方で、震災以前から沿岸部の地域で暮らしている人たちは、近所に住む人が減ってしまったことで、人との交流が減り、自治会が機能しなくなったり、住民活動を縮小しているところも少なくない。

2016年度に町は毎月「コミュニティ支援連



山元町役場仮庁舎



連携した支援に取り組む、(左から)山元町被災者支援班班長 伊藤千春さん、やまもと復興応援センター復興支援コーディネーター 桑野知美さん、被災者支援室室長 渡邊隆弘さん、社会福祉協議会次長 高橋賢一さん、地域包括支援センター所長 只野里子さん

「携会議」を開催している。

参加するのは、町保健福祉課被災者支援室、同課健康推進班、地域包括支援センター、町社会福祉協議会、やまもと復興応援センター、山元復興ステーションの代表者たち。それぞれの活動の状況を報告し合ったり、情報を共有しながら連携し、住民のサポート体制を強化する。

地域包括支援センターは地域サポートセンターの運営を担っている。地域サポートセンターは、仮設住

宅入居者の孤立・引きこも

りなどを防ぐため、相談対応をしたり、住民間の交流の場を設けたりして生活を支援してきた組織だ。被災者支援として行っていたサロン運営の場を、災害公営住宅の集会所に移したりしながら、サロンを開く人材の育成も意識するなど、地域づくりに励んでいる。

また、保健福祉課健康推進班は、災害公営住宅の入居者にアンケートを配付して、健康調査を実施。沿岸部などに暮らしている気にな

民の暮らしや住民同士の交流の様子などを確かめている。健康推進班との話し合

いで、支援機関の関わり方や支援内容を検討し、見守りを行う。気になる住民のことは、地域内で見守り、住民同士で支え合えるように、集約した情報を区長や民生・児童委員とも共有し、うまく住民間のつながりがもたれるよう協力する。

復興ステーションは、町からの委託で宮城大学が運営。住民への聞き取り調査

でも、聞き取りによる調査をしている。健康状態や生活の様子などから、特に気にかける必要がありそうな住民に關して、やまもと復興応援センターと話し合う。

復興応援センターも、仮設住宅から災害公営住宅、沿岸部の住民などに戸別訪問をして、住

集まる会議でファシリテーターを務めて進行を補助したりする役割をもっている。集会を運営するノウハウを直接伝えながら、住民のもつ、お互いを支え合う力を引き出せるように努めている。

「住民とつながりのある機関の集まりがこの会議です」と話す、被災者支援室室長の渡邊隆弘さん。参加している機関のそれぞれがもっている情報を交換するだけでなく、実際に住民のもとへ足を運んでいるため、情報収集と地域への支



新市街地

援を有効的に実施することができる。

被災者支援から地域包括ケアの推進へ

地域包括支援センターは、高齢者の居場所づくりなどのサポートを中心に、地域内のつながりを見直す活動に力を入れている。民生・児童委員などの地域住民を対象に「地域ふれあい支え合い研修会」を開催。暮らしのなかにすでにある地域活動や住民同士のつながりを改めて探し出し、いま地域に根付いている支え合いの様子を学び合う。そ

して、それらに目を向けるたいせつさを考え直しながら、今後の地域づくりに生かそうとしている。

同研修会の成果と今後の課題も、連携会議で共有される。地域包括ケアのあり方や、まち全体での姿勢について話す場にもなっている。地域包括支援センター所長の只野里子さんは「寄り添う対象は同じ住民。たいせつなゴールを共有し、役割分担と連携ができません」と会議の意義を強く感じている。

地域を運営していく住民の背中を押し、自治力をつけてもらう。そのことが、住民の自立的な生活に向けた支援となる。震災やその後のコミュニティづくりなどの支援をとおして、人と人がつながり、支え合うことの重要性を理解している住民も多いという。まちづくりの中心となる機関が力を合わせ、一体となって活動する山元町。被災地域としての復興に向けたまちづくりが住民の支え合いを後押しし、まち全体での地域包括ケアを一層前へ推し進める。

誰でも気軽に 利用できるカフェで 交流や見守りを

女川町運動公園住宅 ふれあいカフェ
(宮城県女川町)



カフェにはたえず笑い声に満ち、いつもにぎやか



女川町運動公園住宅の6号棟1階「コミュニティプラザ」内に、住民有志が運営する「ふれあいカフェ」がある。カウンターと円卓の席が設けられた室内には、週5日（月、木、土）の開催日になると25人〜30人前後の住民が集い、お茶を飲みながらおしゃべりに花を咲かせている。

もともとは2015年5月から、同じ場所と同町社会福祉協議会がカフェを運営していたが、16年3月をもって撤退することが決定し

第19回

た。すでに住民の憩いの場になつてきたカフェをなくしたくないという思いから、住民の手でカフェを継続させることを決め、今年3月から活動を開始した。現在では同住宅の行政区である大原北区で有志を募り、3人の住民ボランティアが1人ずつ交代で運営を行っている。カフェでは10種類前後の飲みものを有料で提供しており、それぞれ1杯50〜150円程度。住民以外の利用も歓迎しているため、同住宅の近くにある仮設住宅の住民や、以前同住宅にボランティアなどで訪れた人が、女川を再訪した際に立ち寄ることもあるという。有料での利用とすることで外部の住民の利用が可能になり、災害公営住宅のなかにありながら、開かれた場所とすることを可能にしている。

カフェでは趣味の活動やレクリエーションは行わない。一般のカフェと同じように、お茶を飲み、会話を楽しむのみだ。カフェを運営する住民ボランティアは「みんな会話を求めてここに来るんです」と話す。同住宅では住民の約半数が高齢者であり、独居者や



1人で訪れてもカフェの運営を担当する住民ボランティアと会話を楽しむことができる

同町社会福祉協議会と連携し、ゆるやかな見守りもを行っている。住民ボランティアはその日カフェを訪れた人の名前を全員分記録しており、いつもカフェを利用して

いる住民が数日姿を見せないときには、同住宅に滞在している同町社協職員に報告をし、職員が該当する住民宅に戸別訪問を行う、というものだ。また、いつもカフェを利用している住民同士はすでに顔見知りになっているため、姿の見えない住民を気づかう声があがれば、「今日買いのものに行くときに見かけた」という声が返るなど、カフェを切っ掛けに住民同士での自然な見守り合いも生まれている。

カフェを運営する大原北区の区長、鈴木浩さんは「みんなのペースをたいせつにしなから活動していきたい」と話す。誰でも気軽に立ち寄りやすいカフェが、今後同住宅内外の交流の起点となることを期待したい。吉

DATA

女川町 運動公園住宅

2014年4月1日から入居が開始され、8棟に約200世帯400人が居住する女川町唯一の災害公営住宅(16年10月現在)。14年7月に行政区が立ち上げられ、カフェのほかにもラジオ体操や庭づくり、季節ごとのイベントなどの活動を行っている。

東日本大震災・おらいの地域の元気興し

支え合い

S-1 グランプリ 第4回いがす大賞

地方創生・新しい総合事業 大見本市

参加者大募集!! 応募期間延長!!

応募〆切 2016年12月26日(月)

各地の元気な支え合い活動を発表し、交流することで、互いに称え合い、学び合うコンテスト「S-1グランプリ」を今年度も開催！今回は、東日本大震災・熊本地震の被災地域の活動発表で「大賞」と「準大賞」を、被災地域以外からの活動発表で、被災地域に生かせる「活動提案賞」を競います！応募書類をもとに予選審査を行い、予選通過者は2017年2月に宮城県仙台市で開かれる本選へ出場できます。会場での発表を審査委員や観客の皆さんが審査し、特に素敵な取り組み・発表を表彰します。復興支援団体や町内会、ご近所サークルのような任意団体など、活動の形式を問わず、どなたでも、お1人の活動からでもご応募できます！

より多くの「いがす取り組み」をお寄せいただきたく、応募期間を延長しました！
募集要綱・申込用紙をCLCのホームページからダウンロードして、2016年12月26日(月)までに事務局へ応募書類をお送りください。

2017年2月26日(日) せんだいメディアテーク1階「オープンスクエア」

宮城県仙台市青葉区春日町2-1

(各本選出場者・団体へ、お1人分の交通費を実行委員会で負担します)

表彰

大賞	10万円 + 副賞
準大賞	3万円 + 副賞
活動提案賞	3万円 + 副賞

【お問い合わせ先】

「S-1 グランプリ 第4回いがす大賞」実行委員会
事務局 全国コミュニティライフサポートセンター (CLC)
〒981-0932 宮城県仙台市青葉区木町16-30
シンエイ木町ビル1F
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
HP <http://www.clc-japan.com/>
担当 清野、田中、小野寺 (知)



S-1グランプリ第3回
いがす大賞(2016年2月)
出場者の皆さんと審査委員



「地域支え合いサロン」レポート

『月刊地域支え合い情報』第50号発行記念イベントとして、「地域支え合いサロン」を、11月5日(土)に仙台メディアテーク内のクレブスクールカフェにて開催いたしました。当日は5人の読者の皆さまにご参加いただき、こじんまりとした会ながらも、これまで発行した号のなかから印象に残っている記事についてのご感想やご意見をうかがったり、またスタッフからは取材時の裏話や紙面に載りきらなかったエピソードなどを交えながら、和やかな雰囲気の中創刊から50号までの歩みを振り返ることができました。読者の皆さまの生の声を聞くことができ、スタッフ一同、身の引き締まる思いでした。今後とも、どうぞよろしくお願いいたします。

サロンにご参加いただきました皆さま、たいへんありがとうございました。弊紙へのご意見やご感想を直接うかがうことができ、とても励みになりました。これからも読みごたえのある紙面がわかるように、努力してまいります。(吉成沙也佳)

参加者の方々からは感想や労いの温かいお言葉をいただき、読者と関係者の皆さまに支えられての50号ということをあらためて実感いたしました。記事を書いて多くの方に読んでいただけることの幸せと責任を噛み締めながら、より一層精進してまいります。(田中義則)

参加された方々のなかには、なんと宮城県外からお越しの方も。私たちが負けてはいられません。さらに軽やかなフットワークであちこちへ取材にお邪魔し、今後も皆さまと一緒に「読みたくなる情報紙」づくりに努めてまいります。(清野哲史)

2012年9月に創刊してから、東北で育まれている「地域支え合い」活動を50冊分お伝えできたことに、感謝と幸せを感じます。しみじみ宮城が大好き。これからも人のつながりとあたたかさ、東北の魅力を発信してまいります。(小野寺知子)

● Profile

ご近所福祉クリエイター 酒井保 (さかい・たもつ)

1961年広島生まれ。知的障がい者施設、市町社会福祉協議会、認知症グループホーム・小規模多機能型施設の施設長職を経て、2014年8月に「ご近所福祉クリエイション」を創設(主宰)。ご近所福祉クリエイターという肩書きのもと、広島と仙台を拠点として、全国各地を講演行脚中。

2016年度より、宮城県塩釜市をはじめ岩手県・宮城県・福島県で地域支え合い活動の立ち上げ等にかかる諸事業に参画。イラストレーター。
主な著書に、「見守り活動」から「見守られ活動」へ(CLC発行)、「生活支援コーディネーターと協議体」(共同執筆、CLC発行)。



居るだけでいい ～99歳のアイドルに 地域が沸いた～

ご近所福祉クリエイション主宰 酒井保

老後を考える

漫画・サザエさんに登場する磯野波平の年齢は54歳ということらしい。僕より一つ年下である。そのことを知った僕は、テレビに映る磯野波平に「波平さん、54歳にしては老けてますね」と自分の若さを肯定してみた。なんとも小さい自分がいる。

ほんの数年前までは、自分の年齢というものに一切関心はなかったが、50歳半ばを過ぎると、「歳をとったな」と感じざるを得ない状況が日常化してくるようになった。40歳の頃、出張先の僕にカミさん(伴侶のこと)から朝な夕なに送られてくるメールは「ちゃんとご飯食べた?」であった。しかし、いま現在、カミさんから送られてくるメールは「ちゃんと薬飲んだ?」である。「うん。飲んで」と折り返す自分に哀愁さえ感じる今日この頃である。

「老い」ということを意識するようになり、漫画のキャラクターと若さを競い合っている小さい自分は、こうやって醸成されたのだった。そんな僕だから、ときに「老後」というものをリアル

に考え、眠れなくなったりする。

「はたして何歳まで生きていられるだろう。80歳まで生きていられるか?その80歳の自分の暮らしぶりは?カミさんより先に逝くか?ひとり暮らしになるのか?」
ともかくにも「健康長寿」ということを願いながら、毎夜、毎夜、羊の数を数えている。

何もしないとという福祉活動

先日、大阪府伊丹市の「地域見守りフォーラム」(主催:社会福祉法人伊丹市社会福祉協議会)へファシリテーターとして登壇させていただいたときのこと。活動報告者としてご登壇された玄内甚四郎さんの年齢に会場

から大きな拍手が沸いた。「99歳の玄内です。来年3月で100歳になります」
滑舌もよく、背筋も伸び、

服装のセンスも抜群で、とても100歳近いお歳には見えない。

ファシリテーターの僕は、99歳の玄内さんに「どんな活動をしておられるんですか?」と訊ねた。その年齢からは想像できない、ものすごく躍動的な活動をしているのだろうと勝手に想像し、ワクワクしながら身を乗りだした僕に、「活動ですか?そんなものは、なあーんもしてへんよ」と一言。なんの活動もしていないのに活動報告者として登壇されるわけがない。主催者の意図を汲み取りながら玄内さんとの会話で見えてきたのは、そのお人柄だった。

99歳・見守られ活動を実践

玄内さんは、地域のふれ愛福祉サロンや自治会のイベントなどに積極的に参加し、自身の健康長

寿を地域の皆さんにアピールしているとのこと。「催し会場へ行けば、必ず玄内さんが居る」と言われるくらいで、もはや「玄内さんのことを知らない地域住民はいない」というくらい有名なようになってしまった。フォーラムでは、地域の皆さんから玄内さんに宛てたビデオレターが投影され、皆さんからの「そこに居てもらっただけで幸せな気持ちになるんです」「玄内さんは地域のアイドルです!みんな玄内さんのファンですよ!」というエールに、照れた様子で頭を掻く仕草が会場の笑いを誘った。

「地域へ出ていくことは楽しいよ。みんなが気にかけてくれてありがたいね。サロンかい?サロンは生きがいや!」玄内さんのように積極的に地域へ足を向け、自分の暮らしぶりをアピールすることは、「見守られ活動」というふうに評価することがができる。僕は玄内さんの生き方に「豊かな老後」を見つけた。

最後に僕は、「心配ごとはないですか?」と訊ねてみた。すると玄内さん、「老後が心配や」……会場から大きな拍手が沸き起こった。

宮城県サポートセンター支援事務所からのお知らせ



サポートセンター行脚

宮城県サポートセンター支援事務所 所長 鈴木守幸

「先生」と呼ばれて

私は、先生と呼ばれると、気分が悪くなる。

「先生」と呼ばれるほどのバカじゃない!と、例によってへそ曲がりの性格が出てしまう。そんななか、やはりこの方は先生と呼ばれるにふさわしい、と思えた話をする。

とりあえず先生と呼んでおけば、差しさわりがないうちに使う「先生」。おだてられている気もするが、呼ばれると自尊心をくすぐられるので、その気になってしまう。

先生といえば、寅さんの映画の光景が思い出される(寅さん以降の日本映画を観ていない、とこの紙面で述べたら、呆れられた)。小林桂樹さんが出ていた『葛飾立志篇』、考古学者の独身教授が、まだ恋愛の研究を極めていないと朴念仁の弁。寅さんにからかわれ、女を好きになるには勉強しないといけないのか!と問われる。教授は、じゃ寅さんは判っているのか!と逆襲。ここで、寅さんの奥深い恋愛論がアリアで述べられる(述べた内容は、映画を観て確認願います)。

寅さんのアリアを傾聴した教授、思わず『寅さん、君は私の師だよ!』と呟えた。「師」こそ、先生と呼ぶにふさわしい。私も納得した次第。

身近に「師」としてふさわしい先生はいますか?私には、隣のコラムを書いている浜上章さん。それから、南三陸町で生活支援センターのマネジメントに尽力された本間輝雄さん(先生)。本間さんは、スタッフから敬愛され、皆さんが先生と呼んでいました。素敵な光景として強く心に残っています。

私をたまに「先生」と呼ぶ輩がいますが、間違わないでください。呼ばれるとその気になるので(間違っているのは、私か)。

師としての先生、思った以上に周りに結構いますね。改めて、謙虚さを持って「師」と向き合います。今回、隣の「師」はウンチの話とか?含蓄のある話でしょう。生臭い私は、いつもよりは毒のない話でした。失礼!!

ひとりごと

サポーターのあなたへ

宮城県サポートセンター支援事務所
アドバイザー 浜上章



いいうんこ、出てますか?

私は毎朝、排便したとき中腰になって股の間から便器に溜まったうんこを観る。かつて、私は少し若かったころタバコを吸っていた。親譲りの弱い胃腸のせいもあってか、ときに細く黒っぽい便が出た。あわせて、当時厳しかった職場環境もあってストレスに苛まれ、便は出づらく、ますます細くなっていた。お腹に苦痛のような痛みと違和感があり、仰向けに寝て手でまんべんなく触ると、しこりのようなものがあった。検査の結果“大腸がん”であることが判明し、手術をした。54歳のときだった。

子ども時代、山陰の田舎で育った。雨漏りがした麦わら屋根の家。トイレは、暗い“ポットン便所”。お尻を拭く紙は、稲わら、新聞紙、チリ紙へと変わった。筵の扉は、もちろん臭いも素通りする。一度、便所に足を落としたことがあった。“うん”の付いた私のために、母親が赤飯を炊いて家族で祝ってくれたこともあった。

社会人となり、都会暮らしになれた。幼少期の田舎暮らしを懐かしく思うが、あの便所だけは嫌だと思った。いま、自宅のトイレは、水洗。それもウォシュレットに進化し、温水で優しくお尻を洗ってくれる。私にとっていまのトイレは、心の底からありがたく最高だと思う。

大腸がんの経験もあって、健康のために10年くらい前から玄米食にしている。よく噛んで食べるので、少量のごはんでも満腹感がある。便も、ほぼ毎回きれいで立派なのがしっかり出る。排便し終わり、立って水を流す前にもう一度便を観る。手を合わせ『うんこちゃん・うんこちゃんありがとう。今日も良いうんこがたくさん出ました。お水さん、トイレさんありがとう。私の身体のすべての細胞さん、血液さん、筋肉さん、骨さん、体液さん、内臓さんみんな頑張ってくれてありがとう。〇〇よ』とつぶやき、両腕で体を小さく叩き抱く。そしておもむろに大の水を流す。これが2年くらい前から私の朝の日課になっている。

出るもの(排泄)があって、入ること(摂食)ができる。身体は、意識しなくても日々当たり前のように働き、不調を整え、私を支え生かしてくれている。ありがたいことです。

『お〜、今朝もきれいな色の立派なうんこがたくさん出たよ』…ところで、あなたの今日のうんこはどんなかな〜?

平成28年度 宮城県被災者支援従事者研修事業

分野別研修Ⅲ
認知症の人の理解と支援

【気仙沼会場】11月24日(木) 気仙沼保健福祉事務所 【仙台会場】11月25日(金) 戦災復興記念館
講師:高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授) / 寺田 真理子(日本メンタルヘルス協会 公認心理カウンセラー)

災害公営住宅への転居期研修Ⅱ
災害公営住宅編

【仙台会場】12月1日(木) 宮城県本町第三分庁舎 【石巻会場】12月2日(金) 三陸河北新報社 かほくホール
講師:小野 竹一(東松島市あおい地区 会長) / 浜上 章(宮城県サポートセンター支援事務所 アドバイザー) / 風 保憲(淡路市社会福祉協議会 事務局次長)

ステップアップ研修

【仙台会場】12月26日(月) 宮城県自治会館
講師:永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)

宮城県サポートセンター支援事務所

〒980-0014 宮城県仙台市青葉区本町3-7-4 宮城県社会福祉会館3階 TEL 022-217-1617 FAX 022-217-1601



気仙沼市出身者が交流する「気仙沼はまらいんや会」

暮らしを支える支援員22

個別訪問を軸に、 コミュニティづくりを支援

仙台市社会福祉協議会・中核支えあいセンター
(宮城県仙台市青葉区)



仙台市社会福祉協議会が運営する「中核支えあいセンター」では、現在、市内5区にいる生活支援相談員25人が、民間賃貸住宅(みなし仮設)1037世帯、災害公営住宅232世帯を対象とする戸別訪問のほか、今年度より住宅再建済みの87世帯および災害公営住宅77世帯へのフォローアップ訪問を始めている(数値は2016年9月末時点)。

仙台市では住宅供与期間が過ぎたため、現在みなし仮設に入居している世帯は、特定延長が認められている人や、他市町で被災し一律延長か特定延長が認められている人、福島からの避難者である。

支えあいセンターの訪問は、独自にセンターで作成した基準に基づき、継続して訪問したほうがよいかを判断して、訪問の頻度を定める。基準に沿って点数化することで、支援員による判断のバラつきがなくなり、被災世帯の自立促進と孤立防止の視点から課題を整理する有効な手段と言える。

また、仙台市では、災害公営住宅に入居すると、市の支援員が訪問したうえで、健康不安がある世帯は区保健福祉センターにつなぎ、地域交流や社会参加を希望する世帯は中核支えあいセンターが引き継いで訪問する仕組みをとっている。さらに、入居当初は見守りが不要と判断された世帯も入居から1年が経ち、体調に変化が出ている可能性があることから、フォローアップ訪問も始めた。住宅再建済みの世帯にも継続

訪問することで、「市内のすべての被災世帯に対して必要があれば戸別訪問し、見守れるようになった」と所長の吉田幸江さんは話す。

災害公営住宅入居者を含む地域での交流事業や、出身地ごとの交流サロンをサポートするのも、中核支えあいセンターの役割だ。震災後、気仙沼市社協と中核支えあいセンターが共催していた、仙台市内で暮らしている気仙沼市出身者のサロンは、1年間かけて自主運営に切り替わり、今年度から会長の濱口正弘さんを中心に「気仙沼はまらいんや会」として再出発。110世帯いる会員の平均年齢は75歳。そこで、会員約70世帯を対象に、市内5区ごとに配置された世話人がこの10月から安否確認をする取り組みも始めている。

いま中核支えあいセンターで力を注ぐのが、災害公営住宅をめぐるコミュニティ形成支援だ。市と共催し、「つなぐ・つながるプロジェクト」と題して、自治会と支援団体のマッチングや、住民リーダーの育成などに取り組む。さまざまなノウハウが生まれることを期待したい。**小**

DATA 仙台市社会福祉協議会・中核支えあいセンター
〒980-0022 宮城県仙台市青葉区五橋2-12-2 仙台市福祉プラザ4階
TEL 022-217-7234 FAX 022-721-1266
URL <http://www.shakyo-sendai.or.jp/>

お知らせ

☆次号予告 特集「若さあふれる地域づくり」

平成28年度 生活支援コーディネーター応用研修

<応用研修1 地域支え合い活動の発見の仕方・広げ方~かかれた資源を見つけ出せ~>

【登米会場】12月8日(木) 登米合同庁舎
【名取会場】12月15日(木) 名取市商工会館
講師: 大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
池田 昌弘(全国コミュニティライフサポートセンター 理事長)
木村 利浩(全国コミュニティライフサポートセンター 主査)

平成28年度 岩手県高齢者等サポート拠点職員等研修事業

<分野別研修 認知症の人への理解と支援>

【釜石会場】12月15日(木) 釜石地区合同庁舎
【盛岡会場】12月16日(金) 岩手県会堂
講師: 高橋 誠一(東北福祉大学 総合マネジメント学部 教授)
寺田 真理子(日本メンタルヘルス協会 公認心理カウンセラー)

平成28年度 熊本県地域支え合いセンター支援事務所人材育成事業

<地域支え合いセンター基礎研修>

【熊本会場②】12月6日(火)~8日(木) ホテルメルパルク熊本
講師: 永坂 美晴(明石市望海在宅介護支援センター センター長)
佐藤 寿一(宝塚市社会福祉協議会 常務理事 兼 事務局長)
風 保憲(淡路市社会福祉協議会 事務局次長)
山本 信也(宝塚市社会福祉協議会 地域福祉部 地区担当課長)

<管理者研修>

【熊本会場】12月27日(火) くまもと森都心プラザ
講師: 大坂 純(仙台白百合女子大学 人間学部 教授)
佐藤 寿一(宝塚市社会福祉協議会 常務理事 兼 事務局長)

読者の声

月刊「地域支え合い情報」は、コミュニティ(地域づくり)から震災・復興を考え、提案していくために生まれた情報紙です。ぜひ忌憚のないご意見・ご感想をFAXまたはメールにて編集部までお聞かせください。

49号の福住町町内会の減災対策にはとても驚きました。情報をすばやく把握するための仕組みづくりや避難訓練などを日頃から積み重ねていた結果が、東日本大震災の際に発揮されたのはすばらしいと思います。やらなければならない気持ちが大事なのだと思いました。(仙台市太白区 A・C)

あなたの活動・地域の活動情報をお寄せください!
TEL 022-727-8730 FAX 022-727-8737
E-mail joho@clc-japan.com

編集後記

おかげさまで、本紙50号記念企画「地域支え合いサロン」を無事に開催することができました。「目指せ100号!」と気持ちを高めつつ、その時期にこだわらなくても、「地域支え合いサロン」を再び開いたら嬉しいです(清野)